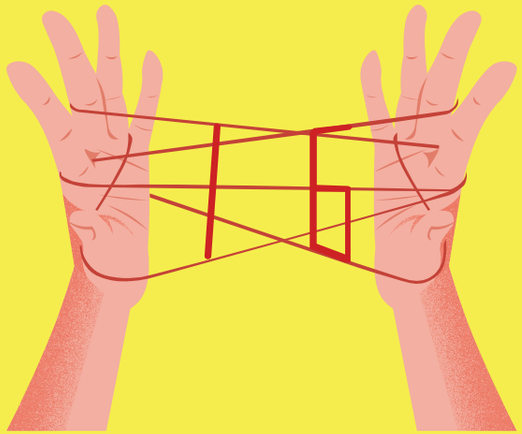
2026 SUMMER

新たなわくわくとドキドキに出会う

Magadipita vol.16

あたりまえのほどきかた



Magadipita vol.16 2026 SUMMER

TABLE OF CONTENTS

01 プロローグ
03 あたりまえのほどきかた

わたしとあなたのあたりまえ
07「ぼく」、「オレ」、「わたし」
09 すきのかたち
11 自由を纏うその前に
13 地図の向こうにあるあたりまえ

きょうのごはん
17 Roots & Routes
19 世界の料理

あたりまえではないもの
23 移りゆく東京駅
25 復興と、その先

あたりまえのほどきかた
29 Identity
31 Think Outside the Box!
33 あたりまえを辿る

37 エピローグ



Magadipita
= Magazine × Serendipity

Serendipity とは、
素敵な偶然に出会ったり、
予想外のものを発見したりすること。
あなたと Magadipita との偶然の出会いが、
予想外の発見につながるように。

今回のテーマは、
「あたりまえのほどきかた」。

毎日繰り返される、あたりまえのこと。
気づけばそれは、固く結ばれた紐のように、
いつの間にか私たちを
がんじがらめにしているのかもしれない。

ふと立ち止まって、その結び目に指をかけてみる。
あたりまえだと思っていたものを、
少しずつほどいてみる。
そこに何が見えてくるだろう。

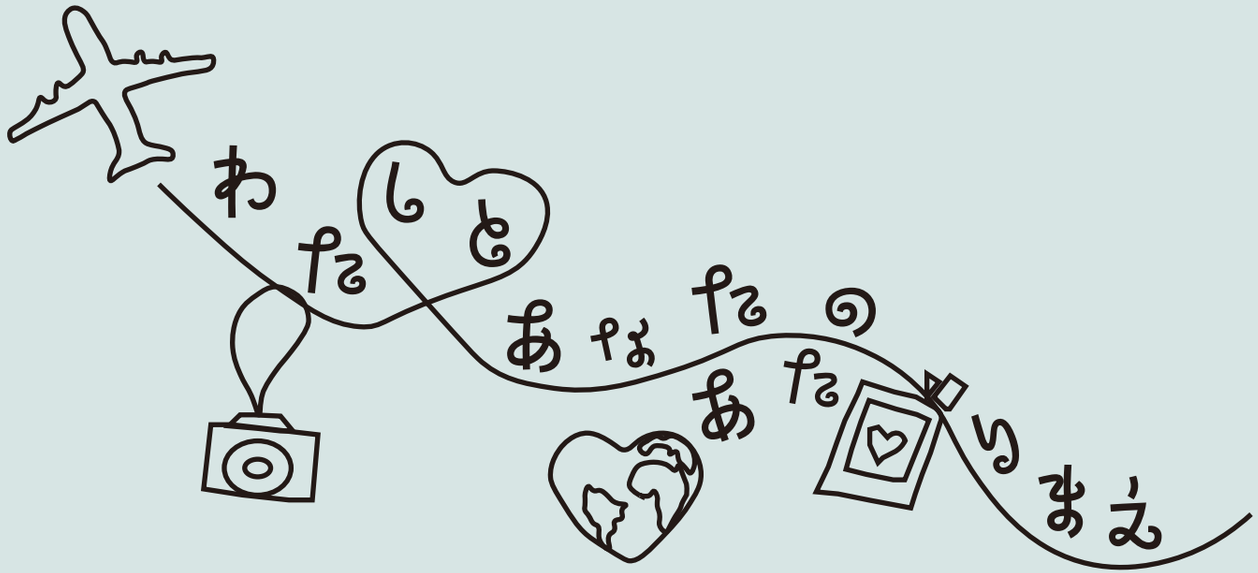
さあ、あたりまえという結び目を、
ゆっくりほどきに行こう。

あたりまえの
ほどきかた

私たちのまわりには、たくさんの「あたりまえ」がある。
無数に伸びる糸の中から、いつも同じ一本を、無意識にたぐっている。
普段だったら素通りするその端っこを、少しだけつまんでみて。
どこに繋がっているんだろう？この先には誰がいるんだろう？

たぐっていくと、他の誰かのあたりまえや、あってあたりまえではなかったものが見えてくる。。
「あたりまえ」は、ほどいてみると案外おもしろい。
さあ、あなたは何からほどいてみる？





私の毎日。

眠たい目をこすりながらベッドを出て、
遅刻ギリギリの満員電車に揺られ、学校へ向かう。
そんな何気ない毎日を、今日もまた何気なく過ごしている。

でも、もし朝の目覚まし時計が聞こえなかったら。
道までの道のりが見えなかったら。

私にとってあたりまえの毎日は、どんな景色に変わるのだろう。

今まで想像したことのなかった、
広くて大きくてワクワクが詰まった世界を、

ほんの少し、冒険してみない？



自由を纏う、その前に

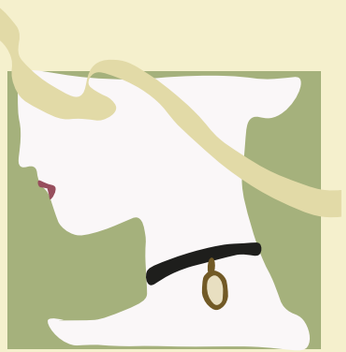
身に着けるもの、買い物にでかけたときになんとなくのぞくおみせ。
自分の心が高鳴るものを見つける時間。
あなたが手に取る服やアクセサリーは、数えきれないほどの選択肢の中から選んだひとつ。
あなたが「今日の自分」に選んだひとつ。

でも、この選択はだれにでもできるもの？





「これ似合うかな？」と手に取ったブラウス。
ブラウスの前面にきれいに並べられたボタンは
「着る」という動作の中では静かな障壁になる。



「今日はこのネックレスがつけたい」
片手でチェーンの片側を固定し、もう一方の手で小さな留め具を探る。
あなたはその目で鏡に映ったペンダントのバランスをたしかめるだろう。



「この靴欲しいけど高いんだよねー」
その靴を買うか、買わないか。
その基準が値段だけなのは、
その靴で自然と歩くことができるのをあたりまえだと思っているから。



でも実は、この何気ない選択の根底には、いくつかの前提が横たわっている。



今日は巻き髪にしようと思って
手に取ったヘアアイロン。
成人式のために選んだ振袖。
このあたりまえの
小さな選択の裏に隠れているものは、
実はあたりまえではない自由のつみかさね。





手話を使う人が羨まし気に見つめている手持ちのバッグ。
視覚障がい者が手に取りかけて、
そっと戻したヒールの高いパンプス。
そんな一周のできごとに気づけるかどうかは、
あなたがどんな目線で世界を見るかにかかっているのかも。



髪の毛をセットすること好きな服を選ぶこと。
そんなあたりまえの選択は、見えること、歩けること、
手を動かせること、安心しておみせに入れること。
いくつもの環境や身体女権の上に成り立っている。

自分にはどうしようもないこと。関係のないこと。
そう思うのはすごく簡単だ。
だけどその視点をすこし変えてみる。
今の自分が見ている景色、自分があたりまえのようにしている
行動の裏に隠されているものに気づいてみる。





気づいた人だけが見ることができる優しい世界がそこには広がっているのかも。
さあ、あなたはどんなあたりまえに気づく？



「ぼく」、「おれ」、「わたし」

ねえ、あなたは自分のこと、なんて呼んでいる？

家の中では、こっそり自分の名前で呼んでいたりして。



でも、一歩ドアの外に出ると、まわりの空気に合わせて、違う呼び方を使い分けてみた･･･。

小さい頃はみんな、境界線なんてなくて、好きな言葉で自由におしゃべりしていたはずなのに。

少しずつ背が伸びるにつれて、私たちは「当たり前」という名のおめかしを覚えていく。





たとえば、女の子が「ボク」や「オレ」を使うこと。

中学生くらいになると、「女の子なんだから『わたし』って言いなさい」なんて、

いつの間にか世の中の「あたりまえ」でぴたりと止められちゃう。

男の子だって同じ。「ボク」って言い続けると「なんだか弱そう」って言われて、

本当は着たくない「オレ」っていう服を着せられちゃうこともあったりして。



そう、これはただの「呼び方」のお話じゃない。

私たちのすぐそばにある、「男らしさ」や「女らしさ」っていう、だれかが決めた「あたりまえ」のお話。

家での自分と、外での自分。
世の中の「当たり前」に合わせて上手に使い分けられるようになるのは、きっと成長の証拠。

だけど、いろんな色の自分を「ふつう」という箱に押し込めて、

ひとつに決めていくのは、なんだか少し、さみしい。

実は、大人への階段をのぼるたびに、
私たちは少しずつ、本当の自分の声をどこかに置き忘れてきているのかも。





女の子だから、ボクもオレもだめなの？　そんなことない。

周りの「あたりまえ」に寄り添って上手に使い分けるのも、あなたがこの世界を生きていくための優しさ。

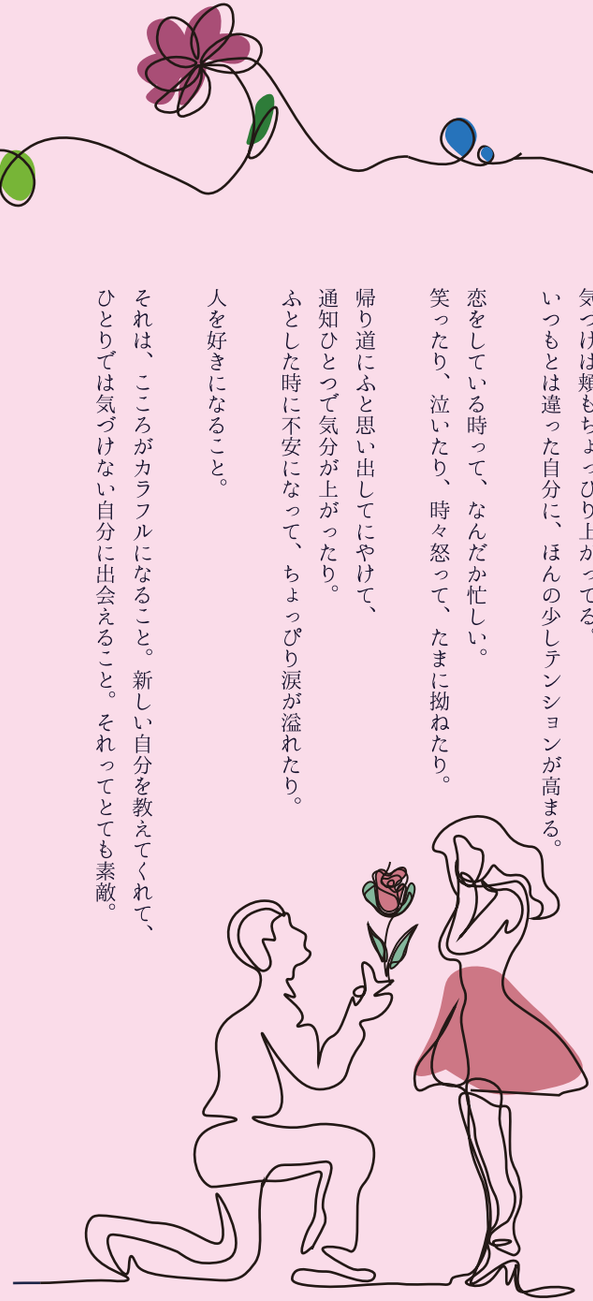
でも、心の奥で小さく丸まっている、

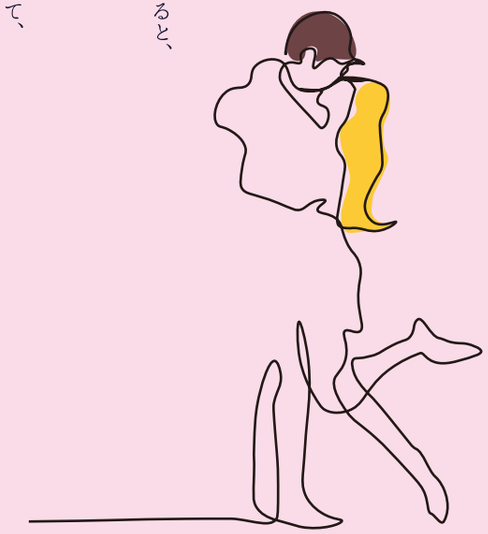
自分の名前で呼んでいた頃の「わたし」や「ボク」の手も、たまにはぎゅっと握ってあげてみて。

すきのかたち

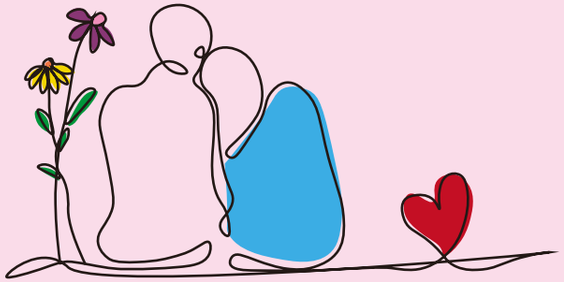
「ドキドキ、キュンキュン」
誰かを好きだとおもう気持ち。その人のことを考えると、
心がほわっと明るくなって、
目が合うだけで、声を聞くだけで幸せになる。
誰かのために髪を切ること。まつげをくるりと上げて、
気づけば頬もちょっぴり上がってる。
いつもとは違った自分に、ほんの少しテンションが高まる。
恋をしている時って、なんだか忙しい。
笑ったり、泣いたり、時々怒って、たまに拗ねたり。
帰り道にふと思い出してにやけて、
通知ひとつで気分が上がったり。
ふとした時に不安になって、ちょっぴり涙が溢れたり。
人を好きになること。
それは、こころがカラフルになること。新しい自分を教えてくれて、
ひとりでは気づけない自分に出会えること。それってとても素敵。











でも、恋をすることだけが「幸せ」なのかな？
いつの間にか耳にする機会の増えた「少子化」「結婚離れ」という言葉たち。
休み時間の恋バナでは肩身が狭いし、
「リアルに充実している人」と「リアルに充実していない人」で分類される世界。
誰かを大切におもう気持ち。それってとても特別なこと。
でも同時に、「恋をしていない時間」にしか出会えない幸せもあるんじゃないかな？
大好きなお友達と旅をして、土日はカフェでゆっくり本を読む。
髪の毛はボサボサで、クルクルしてまつ毛と一緒にお出かけする。
お友達と手を繋いで、いつまでもゲラゲラと大笑いをする。
「幸せ」の形ってきっとひとりひとり違うはず。
誰かを好きになる日も、ひとりで過ごす日も。
誰かと一緒にイヤホンを分け合って歩く夜があるなら、
ひとりで鼻歌を歌って帰る夜があってもいいはず。
ゆっくりでいい、焦る必要も、誰かと比べて落ち込む必要もない。
あなたなりの「リアルに充実した暮らし」探してみない？





地図の向こうにある あたりまえ

いつも通りの日常。
そんな毎日に少し退屈を感じているなら、
海外へ行ってみてはどうだろう。

憧れのヨーロッパ、
エキゾチックなアフリカやアジア、
日本の裏側にある南アメリカ。

どんな場所に行っても、きっとあなたの当たり前が
揺らぐ体験ができるはずだ。
日本での生活の中であたりまえだと思っていることも、
一歩外に出れば決してあたりまえではない。

生活スタイル、価値観や物価など、
私たちとは全く異なる環境で暮らしている人たちがいる。
そんな彼らの日常に少し触れてみたら、
あなたのあたりまえはどんなふうに変わるだろうか。
きっと、日本での生活の良いところも悪いところも、
これまでとは違った視点で見えてくるはずだ。

また、私たちは教科書やニュースを通して、
知らないうちに様々な国に対する
なんとなくのイメージを持っている。

おしゃれな国、
先進的な国、
貧しい国、
治安の悪い国。

しかし実際に訪れてみると、
そのイメージは大きく変わることもある。
良い方向に変わるかもしれないし、
逆かもしれない。
あるいは思っていた通りかもしれない。

海外で当たり前が崩れる体験は、
日本についてより客観的に考えるきっかけを与えてくれる。
そして、他の国や文化に対しても、
より正確で多面的な見方ができるようになるはずだ。

新しい刺激を求めているのなら、
時間とお金に少し余裕があるのなら、
あたりまえの外側を覗きに
地図の向こうへ、一歩を踏み出そう。

「生理痛だから仕方ない」と思っていた。でも。電話健康相談してみた。
（37 歳・女性）

私の 10 代〜20 代は月経痛との戦いだった。
婦人科にかかっても身体が成長しきっていないからだと痛み止めが出されるだけ。
痛み止めも効かず夜も眠れずに朝までうめいて苦しんだ。

そんなとき私に寄り添ってくれたのが加入している医療保険の 24 時間電話健康相談サービスだ。
電話をしたからと言って腹痛がなくなるわけではないが、電話の相談員に心配してもらえると
一人で痛みに耐えなければならない心細さが埋まった。
何度か月経の度に電話をしていたら
「痛みが改善しないことを主治医に伝え、検査が必要か相談してみてください。」
と助言された。



検査の結果、
子宮に月経痛が酷くなる病気が見つかりホルモン治療で月経痛に悩むことはなくなった。

あの頃、私の痛みに寄り添ってくれた相談員の方々にお礼が言いたい。
助言がなければ検査を受けようとも思わなかっただろう。
いつでも電話すれば痛みや辛さに寄り添ってくれる人がいることは
時に病院以上の安心を与えてくれる素晴らしいサービスなのだ。

身体やこころのことで気になることがあったら
T-PEC の電話健康相談が無料で使えるかもしれません。

まずは利用対象者かどうか、T-PEC 利用確認センターでチェックしてみてください。
0120-616-151＜受付時間＞9:00 〜 17:00（日 / 祝除く）

T-PEC
Total Private Emergency Center

きょうのごはん

食べる。
きょうも、なにげなく、食べる。
でも、ひと皿のなかには、

知らない物語が、そっと並んでいる。
その野菜は、どの季節を歩いて、
その料理は、どんな国から来たんだろう。

近くの食卓にも、遠くの食卓にも、
だれかの暮らしが、つまっている。
きょうのごはんから、

ちょっとだけ、旅に出てみない？

Roots & Routes



スーパーに行けば、今日もトマトがある。じゃがいもときゅうりもある。いちごだってちょっと高いけど、冬に買える。「食材を買いに行く」ことはあっても、日常生活で敢えて「旬のものを探しに行く」ことって最近あったかなぁ。

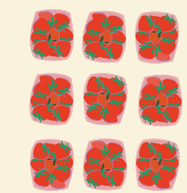


たまたま直売所に立ち寄ったときだった。そこに丁寧に並べてある野菜は、ほとんどがスーパーでは出会ったことのない見慣れないものばかり。近づいてみると、目に飛び込んできたーー「今が食べどき！旬の野菜！」「朝とりたて！」。ポスターがずらりと並べられていた。ふと、ひとつのポスターの真下の真っ赤ないちごが目に留まった。「今いちごが旬かぁ」と思った。

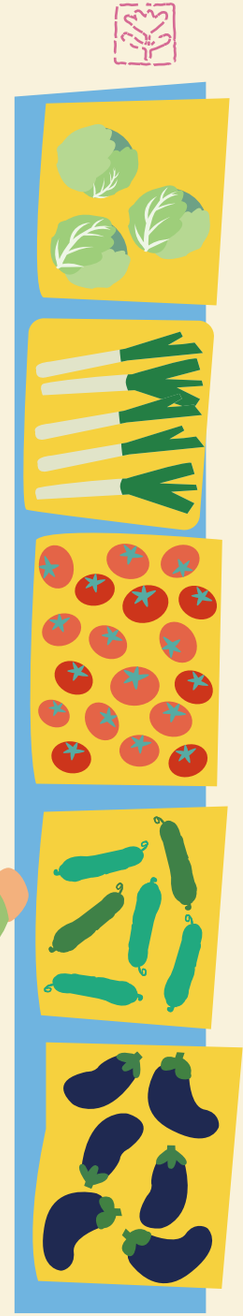




そもそも、「旬」という言葉、知っているようで、意外としっかりと説明できない。旬とは、ある食材が一年でもっともおいしく、栄養価も高い時期のこと。昔の日本人はそれを「走り・旬・名残」という三段階で捉えていたんだとか。



走りは、その季節の食材が出始めた頃。まだ数が少なく、値段も高いけれど、新しい季節の訪れを感じさせてくれる。旬は、食材が最も充実した時期。味も濃く、栄養も豊富。名残は、季節の終わりに差し掛かった頃。「もうすぐ食べられなくなるよ」って、ちょっぴりさびしい味わいがあるかも。食べることで、季節を感じられるのかも。







旬のたけのこ、夏のきゅうりやトマト、秋のさつまいも、冬のだいこん。旬の野菜は、ハウス栽培や産地リレーで年中手に入るものと比べて、栄養価が 2〜3 倍になることもあるんだとか。旬のものを食べるのは、体にいいだけじゃない。その土地の、その季節の恵みをまるごと受け取ることでもある。





実はスーパーの棚が一年中同じなのには、理由がある。「産地リレー」という仕組みだ。日本は南北に長い。同じ野菜でも旬の時期が地域によってずれる。その特性を活かして、産地を次々と切り替えながら消費地へ届け続ける。キャベツなら、春は千葉・神奈川、夏は群馬、冬は愛知ーまるでバトンを繋ぐように。

この仕組みが全国の基準になったのは、1966 年のこと。国が産地を指定し、安定して届ける体制を整えたことで、食卓の景色は大きく変わった。「いつでも同じ野菜が買える」というあたりまえは、せいぜい 60 年ほどの歴史しかないかも。



北海道で農業ボランティアをしていたとき、農家さんにこんな話を聞いた。鹿児島のじゃがいもの季節が終わる頃に、北海道のじゃがいもが全国に届き始めるんだとか。全国の食卓が途切れないように、産地がバトンを繋いでいる、と。

便利になったことは、悪いことじゃない。でも、その「あたりまえ」が、いつ、誰によって作られたのかを知っているかどうかで、食卓の見え方が少し変わるかも。

あなたが今日食べた野菜は、どこから、どの季節から、どうやって来たのだろう。一度、想像してみて。





世界の料理

異国の香りがする料理はいつだってわたしたちをわくわくさせてくれる。
食べる前にちょっとまって！！
おいしい！で終わっちゃうのは少しもったいないかも。
せっかくなんだからその国のことを知るきっかけにしてみたらおもしろいんじゃないかな。
遠い国の存在がおいしい！をきっかけに一気に身近に感じられるチャンス！！





どんなところでどんな人がどんなものを食べているんだろう…
そんなことを考えるだけで世界がどんどん広がってわくわくするかも。
世界にはいろいろな料理があってその数だけそれを食べているいろいろな人がいて…
それをひとつひとつ知っていく時間はたのしくてわくわくするものなのかも。
やっぱりいろいろなちがいがあるから世界っておもしろいよね。
異国の料理を体験することで日本の料理のよさに改めて気づくことができるかも。

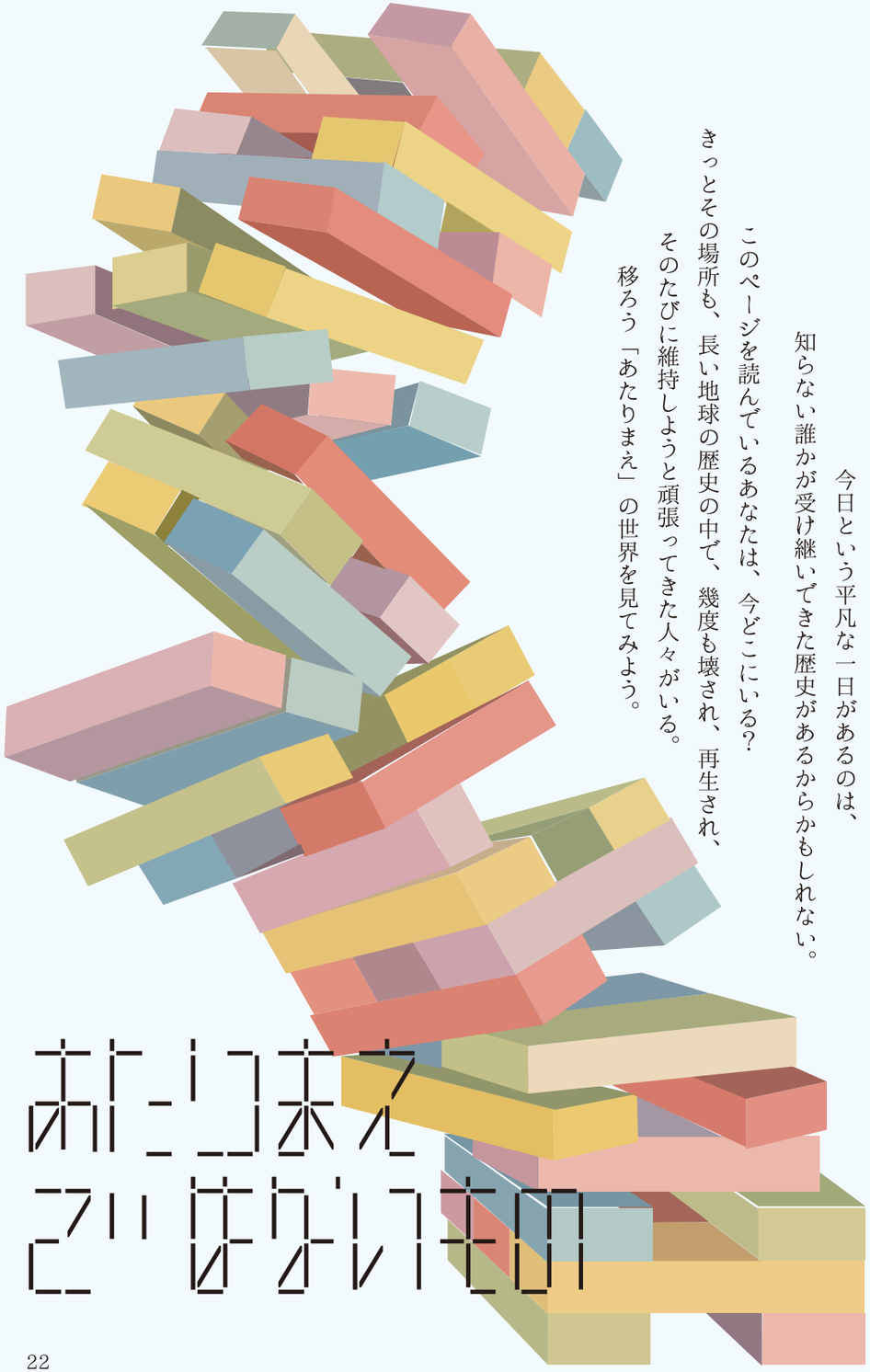
Fiji

夏にフィジーでホームステイした時に
飲んだり食べたりしたものの数々。
どの料理にも何百年と南国で暮らしてきた先人の知恵が
詰まっているんじゃないかな。
ココナッツを割った時に出てくる水分を飲んで、
余った果肉はココナッツミルクなどに！
海で魚を獲ってきてそれを揚げたり蒸したり、
主食は村でとれたキャッサバ。
島の自然に囲まれながら
一日一日を生きていて
いつものわたしたちの食生活とは全然違っていた。
私たちの普段の食生活も
せかいのどこかの誰かから見たら驚かれるのかも。
いろいろな国にいったりいろいろなものを食べて
すこしずつこのおおきいせかいのこと知っていきたいね。

食べること。
それは生きていくうえで避けては通れないこと。

せっかくならいろんなものを食べて味わって、
いろんなことを感じて、思って、考えたい。
誰もがするこの行為は人と人が
つながることを簡単にしてくれるはず。

久しぶりにゆっくりご飯を食べようよ。
忙しくて忘れていた小さくてたのしい冒険がはじまるかも。
愛おしい思い出と最高のお料理は
きっと私たちの日常をきらきらさせてくれる
魔法の力があるから。



おとなまえ
ってなんだっけ

昨日と同じ道を歩き、同じ電車に揺られ、同じ教室に着く。
変わり映えのない景色にあくびが出そうになりながらも、また家路を辿る。
私たちの生活は、目に見えない誰かの手によって支えられている。

今日という平凡な一日があるのは、
知らない誰かが受け継いできた歴史があるからかもしれない。

このページを読んでいるあなたは、今どこにいる？
きっとその場所も、長い地球の歴史の中で、幾度も壊され、再生され、
そのたびに維持しようと頑張ってきた人々がいる。
移ろう「あたりまえ」の世界を見てみよう。

移りゆく東京駅

大学へ向かう道の途中にある駅。いつも授業を受けている建物。友人との待ち合わせに使う広場。
私たちは毎日のようにそうした場所を利用している。でも、その場所がどんな歴史を歩み、
どんな人々に使われてきたのかを考える機会は意外と少ないのではないだろうか。
何気なく通り過ぎている場所も、長い年月の中で多くの人々の暮らしを見つめてきた。
そこには、そこで過ごした人々の記憶や、建物をつくった人の思いが積み重なっている。
では、その建物はどのようにして今まで残ってきたのだろう。

今回は、人々の思いとともに時代を生き抜いてきた建築の一つである東京駅丸の内駅舎を
たどりながら、「建物が紡ぐ歴史」について考えてみたい。
物の価値は、ただ古いということだけでは測れない。
そこには、時代を写した技術や文化があり、暮らした人々の記憶がある。
私たちが何気なく使っている建物も、誰かの思いによってつくられ、守られ、
今この場所に立っている。
次に大学や駅を訪れた時、その建物がどんな時間を過ごしてきたのか、
少しだけ想像してみてほしい。



何度も消失の危機にあった

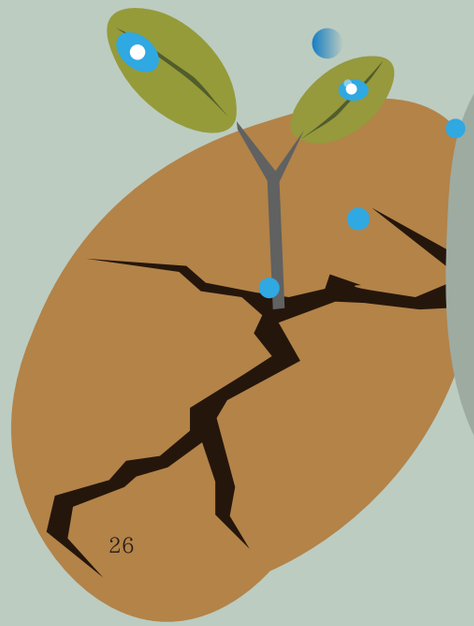
東京駅は、1945 年の東京大空襲では大きな被害を受け、屋根や 3 階部分の多くが失われてしまう。
それでも駅舎は姿を変えながら使われ続け、戦後の東京を支える存在となった。
その後、東京駅の建て替えも検討されたが、「この駅を残したい」という多くの人々の声が集まり、
保存されることが決まる。

なぜそこまで人々は東京駅を残したかったのだろうか。
東京駅は、多くの人にとって単なる交通施設ではなかった。上京した日の記憶や、大切な人との別れ、
旅立ちの風景、それぞれの人生の一場面と結びついた特別な場所だったのである。
そうした思いに支えられながら保存が進められ、2003 年には重要文化財に指定された。
そして創建当時の姿を目指した復原工事を経て、現在の美しい駅舎へと受け継がれている。

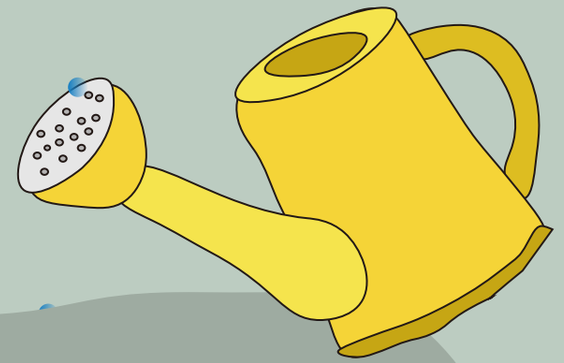
復興と、その先

震災。今まで意識もしていなかった「あたりまえ」が一瞬で崩れていく。
あたりまえのように使っていた水道、電気、ガス、道路。
時には人の命さえも奪われてしまう。
「復興」は必ずしも元の日常に戻せるとは限らない。
元の「あたりまえ」に戻すのは不可能だろうと人々は日々、より良い方向へと奮闘する。
「あたりまえを見つめ直す」とは、今自分が持っているものを知るということでもあると思う。
変わらないことをあたりまえにしていいのか。
変わることを恐れず奮闘する復興から見つめ直してみよう。

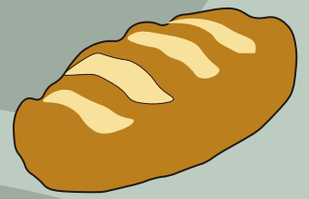




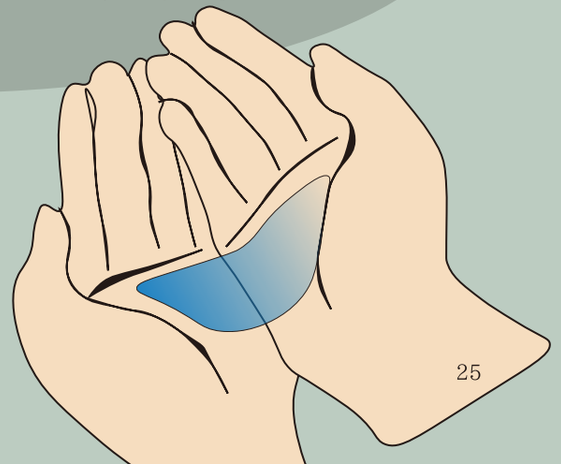
2024 年 1 月。能登半島を襲った大地震。
被った人的被害、物的被害は計り知れなかった。
実際、2026 年現在でも道路や家屋は半壊した状態が続いている。
復興は簡単には終わらない。それでも奮闘を続ける。
伝統を途絶えさせない、また人が住めるようにしたい。
地元の人々はもちろん、能登に移住した人も。
彼らはみな境遇は違えど、思いは一致している。
割れてしまった地面でも、丁寧に手入れしなおせばまた目が出ると信じて。
雨が降った後は小さな虹がかかると信じて。



ケロンの小さな村。
能登にある自然体験ができる場所。年間 5000 人ほどが訪れる自然豊かな
ここは地域の人のよりどころになっている。澄んだ湧き水が曲がれる水路、
田畑や、パン工房、手作りの木製遊具。夏には子どもたちを集めて植林活
動や田植え体験を行う。心が安らぎ、時間がゆっくり流れていくようだ。
この村も被害を受けたが、再建への歩みを進めている。
「復興」では元通りにすることよりまた生活を再建していく方が重要だ。今
まであったあたりまえが変わることも多い。そんな中でも変わらずあり続
ける、みんながほっとできるところ。
それがこの場所、ケロンの小さな村。

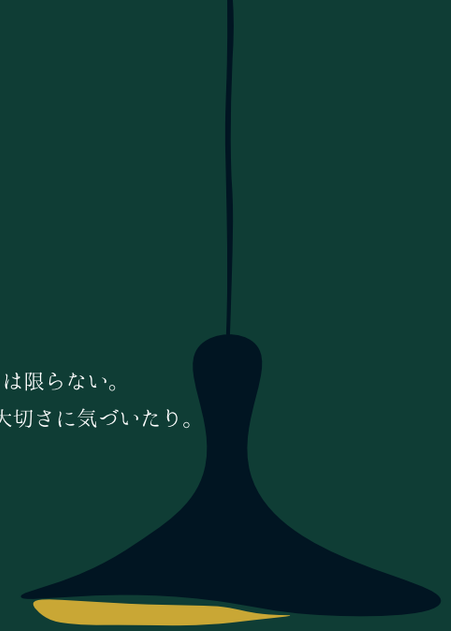


私たちが生きていく上での「あたりまえ」は日々、変化している。
使う紙幣が変わったり、転職が普通になったり、結婚が普通ではなくなったり。
そんな中でも在り続けるあたりまえも大事。
今手の中にある「あたりまえ」でも大事なものはこぼさず、
そして変わっていく「あたりまえ」を受け入れることも考えてみよう。





今日あるものが、明日もそこにあるとは限らない。
すべてを突然奪われたり、失って初めてその大切さに気づいたり。



そう考えると、今ここにあるあたりまえの日常が
これまでよりずっと愛おしく思えてこない？



なんでもない日に花屋に立ち寄って、
花束をひとつ買ってみる。



食後のコーヒーとプリンは、
ささやかな贅沢。



今日という日は、二度と同じ形では訪れない。
だからこそ、今日を大切に生きたい。
いつもの日常を、もう少しだけ大事に生きてみる。そんな小さな心がけが、日々をきっと変えてくれる。

自分にとって、
君にとって、「あたりまえ」ってなんだろう。

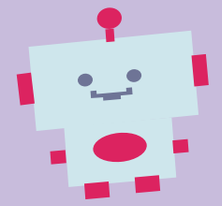
「あたりまえ」って退屈なもの？
つまらないもの？
それとも、
安心できるもの？

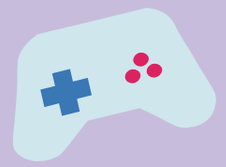
「あたりまえ」についてなんて、あたりまえだからこそ考えない。
だけど、
「あたりまえ」の中には、まだまだ自分の知らない一面が隠れているのかも。
知っているようで知らない世界を少しのぞいてみよう。



あたりまえのほどきかた

「みんなやってるから。」
小さいころ、こんな言葉をよく使わなかった？
みんな持ってるから、
みんな知ってるから、
みんなやってるから、私も欲しい。





子どものころは、みんなとお揃いが良かったのに、
大人になると個性が欲しくなる。
自分のやりたいこと、自分のなりたいもの。
人と違う自分のなにか、アイデンティティ。

大人になったら、自分のことを自分で決めないと
いけないらしい。
自分は何が欲しくて、何がしたいのか。
夢がある子は、あんなにキラキラしているのに、
自分はいったい、何者なの？



Identity

本当の自分は、どこにあるんだろう。

それはまだ体験したことのないこと？まだ知らない世界？
外の世界に目を向けがちな私たち。

だけど、もうすでに知っていることかもしれない。
自分の中をのぞいてみよう。

きっと、それは自分の「あたりまえ」の中に答えがある。
「あたりまえ」って、自分でも意識しないくらいの自然な選択。
それは、徳悦な出来事の中ではなく、何気ない毎日に隠れている。

例えば、無意識に選んでしまうもの。
気づけば足が向く場所。
つい話したくなる人。
思わず時間を忘れてしまうこと。
落ち着く瞬間。落ち着く匂い。落ち着く時。
食べたい、飲みたい、見たい、聞きたい、感じたい。
そんな君の感覚が向かう先。

みんなそれぞれ違う。
小さなことだけど、それらは立派な君の選択。

誰かと同じじゃなくていい。
心が自然と動くもの。
気づけば何度も選んでしまうもの。

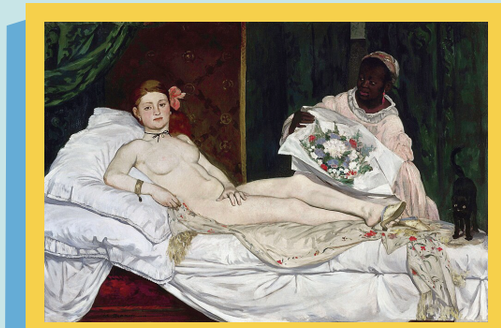
そういう「あたりまえ」の積み重ねが君らしさなのかもしれない。

「自分は何者なの？」

そう考えることは、きっと誰にでもある。
だけど、答えは案外近くに転がっているものなのかも。
君の生活の「あたりまえ」に目を向けてみよう。

それこそが、君の identity。

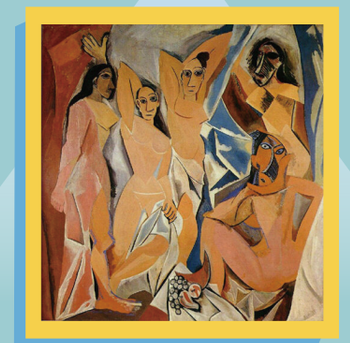
Think Outside the Box



オランピア (1863)

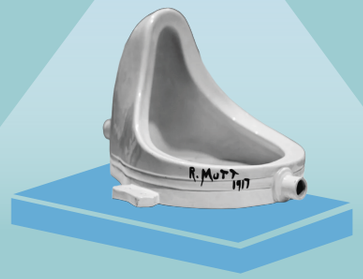
1865 年、パリ。
マネの“オランピア”がサロンに現れると、会場は大騒ぎになった。
絵の前では笑いやヤジが飛び交い、なかには傘や杖で作品を傷つけようとする人までいたとか。
当時、女性のヌードといえば、神話の女神などを描くのが一般的。
マネじゃ娼婦を思わせる同時代の女性を堂々と描いたのだから、大きな反発を招くのも無理はなかった。
けれどそんな問題作も、今では近代絵画の扉を開いた一枚として高く評価されている。

「ふつう」の箱の中は居心地がいい。外に出ようとすれば変だと言われたり、笑われたりするかもしれない。
でも、今ではあたりまえになったものだって、最初からすんなり受け入れられたわけじゃない。
アートの世界であたりまえがひっくり返された瞬間を見てみよう。



アヴィニョンの娘たち (1907)

女性たちの身体は鋭く切り分けられ、顔はまるで仮面のよう。
「美しく、現実らしく描く」という当時のあたりまえから
大きく外れたピカソの絵は、大きな反発を招いた。
けれど、その型破りな表現はキュビスムへという新しい可能性
を切り拓いていったんだ。
考えに行き詰まったときは、ピカソみたいに一回ぜんぶ壊して
みるのもアリじゃない？



泉 (1917)

ここに置いてあるのは…まさかのトイレ!?
「芸術は、芸術家がその手でつくるもの」。
デュシャンはそんなあたりまえをひっくり返し、すでにある
ものを作品とする手法が生み出したよ。
もしこれもアートなら芸術の境界線はどこにあるんだろう？
私が部屋に脱ぎ捨てた靴下もアートになるのかな？

アートはキャンバスを飛び出して、街の中へ！
バンクシーは正体を明かさず活動を続ける、ストリートアーティスト。
世界各地の街角に突如現れるグラフィティは、
社会や政治への鋭いメッセージを投げかけてきた。
街の壁に絵を描くことは、芸術？それともただの犯罪？
あなたはどう思う？



風船と少女 (2002)

アーティストたちは自由な発想でいろんな「あたりまえ」をアップデートしてきたんだね。
息が詰まる日があったら、思考を箱の外へ連れ出してみよう。壊したり、ひっくり返したり、
ぐちゃぐちゃにしてみたり。
そうすれば世界はもっとでこぼこで、もっと自由で、もっと愛おしい場所になるはず。

あたりまえを辿る

あたりまえは、はじめから揃っているものではない。
日々のささいな「なんとなく」が積み重なって、
気づかないうちにゆっくりとつくられていくものだ。

線の中にきれいに収める

枠からはみ出ないようにきれいに塗る

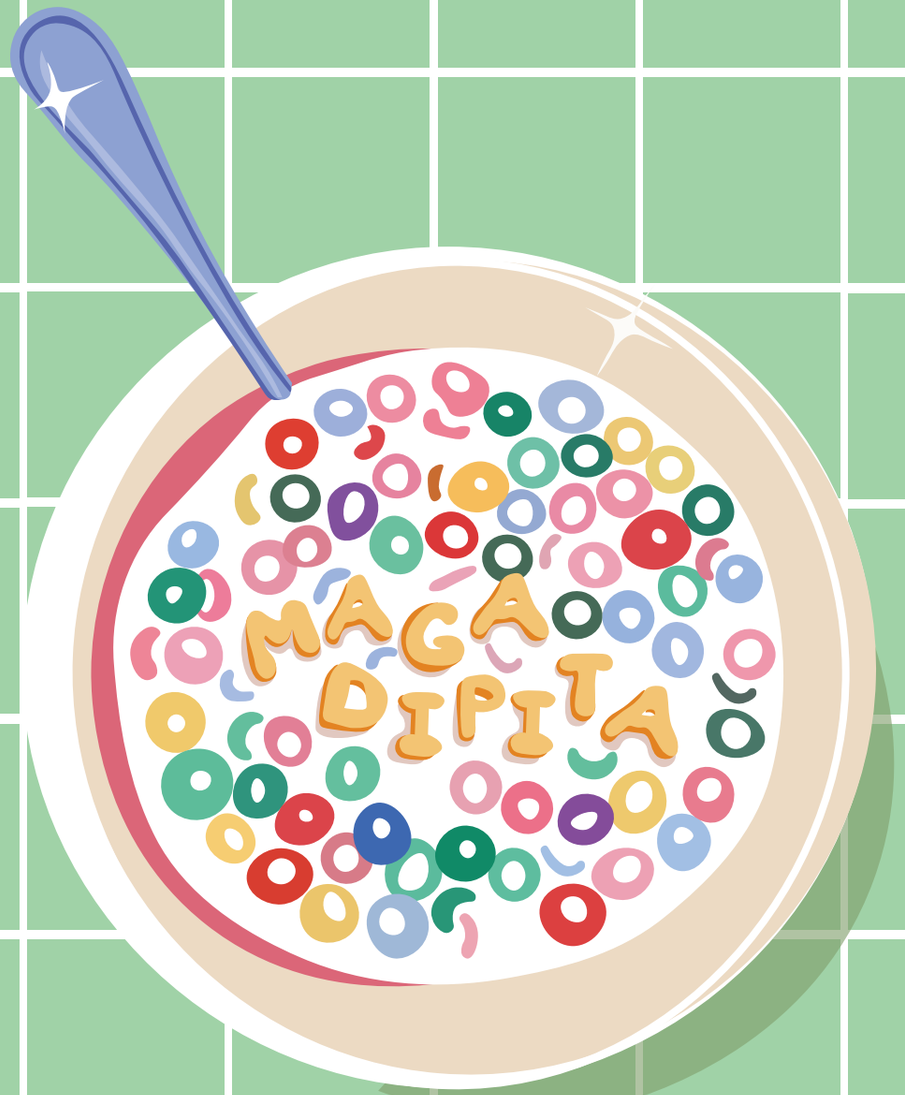
間違えた線も消しゴムできれいに消す

子どもの頃はもっと自由だったはずなのに、
大人になるにつれて、誰が決めたのかもわからないあたりまえを守るようになってしまう。

日々の選択一つひとつにも、あたりまえが潜んでいる。
なんとなく選んだ商品。その「なんとなく」はどこから来てる？
そのルーツを辿れば、家族が長い時間をかけてつくってくれた
家庭の小さな文化にたどり着くんだと思う。

あなたのあたりまえはどこから来てた？
きっと、誰かによってつくられたものが多いんじゃないかな。
自分のあたりまえが、いかに他人の手によってつくられていたのかを知って
ちょっと、びっくりしたりして。

すべてを自分の手で選ぶのは疲れる。
用意されたあたりまえに身を任せる瞬間があってもいい。
けれど、たまにはそれを手放して、
あなただけのあたりまえを新たにつくっていくのも楽しいかもね。


MAGA
DIPITA

Editor's note

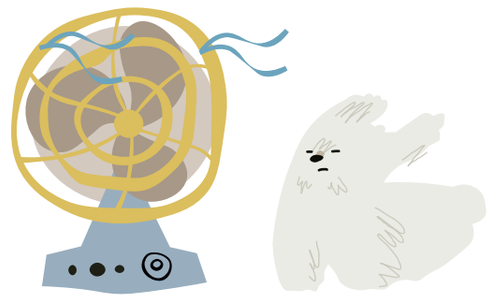
真夏の昼下がり、扇風機の首がゆっくり左右に振れている。
その風を追いかけるように、犬がだらしなく伸びていた。
あんまり気持ちよさそうだったから、隣にごろんと寝転んでみる。
風がふわりと顔を撫でて、遠くで蝉の声がする。
カーテンが揺れる音、氷が溶けるグラスの音。
何をするでもない、ただの午後。

いつからだろう。何もしない時間を、「無駄にした」と思うようになったのは。
毎日頑張っている自分を認めてあげずに、
昨日と似た一日を過ごしてしまった自分を責めるようになったのは。

でも、こうして扇風機の前でぼーっとしていると
あの頃と同じ気持ちが蘇ってくる。
私にとっては普通の一日は、誰かが願ってやまない一日かもしれない。
私にとってはいつものことでも、地球の裏側では特別なことかも。
今日の私のあたりまえが、明日もそうであるとは限らない。

そう考えると私の毎日って思ったよりも特別で、ときめきに満ちているのかも。
今日は日記になんでもないことを書いてみよう。
たとえば久しぶりにゆっくり昼寝をしたこととか、
こうして遠くのあなたに届ける言葉を書いていることとか。

凝り固まっていたあたりまえが少しずつほどけていく予感がする。
まずはこの一冊から。あなたも、Serendipity に出会えたら。





▼公式ホームページはこちら

@sal_magadipita

@MAGADIPITA

▼アンケートのご協力お願いします



CREDIT

Editor in Chief　Emi Kaneko

Creative Directer　Ako Watanabe

Editorial Designers　Moe Shiraishi　Nao Kaneko
Eiki Ito　Rei Nagatomi
Miku Kamasuka　Kana Yamamoto
Raku Tahara　Karen Iida
Yuuta Aizawa

Sponsorship　T-PEC Total Private Emergency Center

Printing Support　gr@phic®

Publisher　慶応義塾大学 公認学生団体 S.A.L.
https://www.salkeio.com